

アスレティックトレーナーのイメージについての検討 ～第二報～ 学年間の差に着目して アスレティックトレーナーのイメージ

了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科 上岡尚代, 野田哲由

An Analysis of Cognitive Images of an Athletic Trainer -2nd Report- Cognitive Images of an Athletic Trainer

要旨

本研究はより良いAT教育の示唆を得るために、アスレティックトレーナー（以下、AT）を目指す学生が持つATのイメージについて調査した。学年ごとのATに対するイメージの違いを捉え、教育内容や量の学年ごとの違いがATのイメージに与える影響を確認する事を目的とした。対象はAT養成課程1～3年生149名であった。調査には質問紙を用い、ATに関する「知識・技術・態度・方法」の4つの大項目にそれぞれ3つの小項目を設け、それぞれの重要性の認識率を調査した。各項目に対する重要性の認識率を学年間で比較すると、「知識」「技術」は2, 3年生に比べて1年生では有意に低い小項目が多かった。「態度」は学年ごとで差が無い小項目が多かった。「方法」は全ての小項目で学年が進むにつれて重要性の認識率が有意に高くなることが確認された。学年によってAT教育の内容と量は異なるが、現行のものではATの「知識」「技術」「指導」の重要性の認識率の向上に関連があるが、「態度」については大きな関連はないと結論した。

キーワード：AT, 教育, 質問紙法, 学年

Abstract

This study was to survey and analyze the cognitive images of an athletic trainer among university students who want to be athletic trainers. To examine the influence of educational content and its volume, we focused especially on the differences between school years about the cognitive images of an athletic trainer. Subjects were 149 university students. We used the questionnaire which consisted of the following four major items, 1) knowledge, 2) skills, 3) manners and attitudes, and 4) instruction. Each item had three minor items. We compared percentages of the students who recognized the importance of each sub item between 1st, 2nd and 3rd year students. In the 2nd and 3rd year students, the cognition of importance about sub items of 1) knowledge and 2) skills was significantly higher than that of the 1st year students. As regards 3) manners and attitudes, there were little sub items which was significantly recognized its importance. In higher year students, the cognition of importance about 4) instruction was significantly higher than that of lower year students as regards all sub items. We concluded that, the difference of educational content and its volume according to school-year difference did not have a significant relationship with the cognitive images concerning manners and

attitudes of AT, while it did with those concerning knowledge, skills and instruction.

Keywords : AT, education, questionnaire, grade

I. はじめに

米国におけるアスレティックトレーナー（以下、AT）の歴史は、1950年に現在のNational Athletic Trainers' Association（以下、NATA）が設立されたことに始まる。その理念は、「競技者および身体活動を行う人々に対する健康管理の質の向上、外傷・障害の予防、評価、処置およびリハビリテーションの領域において教育と研究を通してATの職業的發展を図ることにある。」とされ、職業として確立されている。¹⁾

従来日本では、NATA公認ATのような、公認制度やAT養成校はなく、柔道整復師、鍼灸師、あん摩マッサージ指圧師などがスポーツ選手のサポートを担ってきた。財団法人日本体育協会は、トレーナー制度を確立すべく、1994年に日本体育協会公認AT（以下、JASA-AT）養成事業をスタートしている。財団法人日本体育協会では、JASA-ATの役割を「医療関係の法律に抵触しない範囲でスポーツドクターとの緊密な協力のもとに、競技者の健康管理、スポーツ外傷・障害の予防と応急処置、アスレティックリハビリテーション、コンディショニングなどを担当すること。」と位置づけ、ATを養成する方針を打ち出した。更に、2005年に日本体育協会公認スポーツ指導者制度の改定に伴い、公認スポーツ指導者養成共通科目カリキュラムは大幅に見直され、新たなカリキュラムがスタートしている。その中で「ATの役割とは」が明記された。つまり、スポーツ現場におけるATの役割がますます重要味を帯びてきたと言える。そのような背景の中、了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科（以下、本学科）では、平成19年度よりJASA-ATの養成を開始している。財団法人日本体育協会からJASA-ATの養成を認められた「適応コース」の認定校である本学科は、財団法人日本体育協会が掲げた到達目標や必要な講義、演習、実技、実習などの養成課程に沿って教育計画が立てられており、スポーツ選手のサポートを行う為に必要な知識・技術を学ぶことができる内容がカリキュラムに組み込まれている。

しかし山本²⁾は、「ATに必要とされる能力は机上の学習で養った知識や技術では不十分であり、選手の状況を的確に察知したアプローチの方法を微調整する応用力と技量が必要である。」と述べている。また、浦辺³⁾は、スポーツ現場の医療チームで求められる人材は、「①医療担当者としての専門性があり、責任を果たせる人。②フロントとの交渉をトラブルなく行える人。③指導者と良い関係を築ける人。④選手との信頼関係を築ける人。⑤社会の常識を知っている人。」としており、更に「広く世間の常識を持ち、バランス感覚を持っていることや、情報収集に基づいた適正な判断が下せる能力が必要。」と付け加えている。このように、JASA-AT養成課程の担当教員は、ATを目指している学生に対してJASA-AT資格試験を合格する為の知識・技術を伝えるだけではなく、卒業後にスポーツの現場で臨機応変に対応できる人材を養成することが求められる。しかし、スポーツの現場で求められる資質・能力を持つATを養成するための手法は明確ではない。ほとんどの教員は、学習効果を上げるための対策を常に模索する必要があると思われるが、特にJASA-ATの養成は歴史が浅いためその情報は少ない。

そこで本研究は、了徳寺大学研究紀要第三号に掲載された第一報に引き続き、ATを目指す学生が、

将来の目標とするATに対しどのようなイメージを抱いているのかを調査し、より良いAT養成課程とする為の示唆を得るために行った。AT養成課程の学年ごとのATに対するイメージの違いを捉え、学年ごとに異なる教育内容や教育の量がATのイメージに与える影響を確認する事を目的とした。

II. 方法

1. 対象

対象は、本学科のAT養成課程を履修している学生149名であった。内訳は、1年生（以下、AT1年生）の73名（男女：19歳±1歳）、2年生（以下、AT2年生）の39名（男女：20歳±1歳）、3年生（以下、AT3年生）の37名（男女：24歳±1歳）であった。

2. 調査の手順

第一報と同様に、本学科の学生に理想のAT像、理想としないAT像について自由記述方式による予備調査を実施し、得られた理想像を4項目に分類し、各々の項目に更に小項目を設けた質問紙を作成した。この質問紙で調査を実施し、得られた結果を検討した。

質問紙は第一報と同様のものを使用した。予備調査から得られた学生のATに対する理想像を、「文部科学省高等学校生徒指導要録の各教科の評価の観点及び趣旨」⁴⁾と「財日本体育協会公認AT教育目標」を参考に、「知識」、「技術」、「態度」、「方法」の4つの大項目に分類して作成した（表1）。この4つの大項目に対し、更に3つずつ小項目を設けた。各々の大項目における小項目は以下の通りである。

1. 知識に関する大項目には、①身体に関する知識②運動の種目特性に関する知識および③スポーツ外傷・障害予防に関する知識の3つの小項目を設定した。

2. 技術に関する大項目における小項目は、①スポーツ外傷・障害予防の技術②ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術及び③スポーツ外傷・障害の治療技術とした。

3. 態度や行動の仕方に関する大項目における小項目は、①協力・責任・公正などの社会的態度②辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度及び③安全に対する配慮・準備に対する態度とした。

4. 指導方法に関する大項目における小項目は、①. 指導上の問題把握の方法②指導上の工夫の方法及び③指導上の成果確認の方法とした。

【表1】アスレティックトレーナーのイメージについての質問紙

みなさんのアスレティックトレーナーのイメージについて、下記のアンケート調査を実施します。

以下の質問項目に対する「重要度」を5・4・3・2・1の5段階で○をつけてください

5：そう思う 4：どちらかと言うとそうおもう 3：どちらかと言うとそう思わない

2：そう思わない 1：わからない

1-①アスレティックトレーナーにとって身体に関する知識が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

1-②アスレティックトレーナーにとって運動の種目特性に関する知識が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

1-③アスレティックトレーナーにとってスポーツ障害・外傷に関する知識が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

2-①アスレティックトレーナーにとってスポーツ障害・外傷予防の技術が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

2-②アスレティックトレーナーにとってウォーミングアップや疲労回復など身体の調整（コンディショニング）技術が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

2-③アスレティックトレーナーにとってスポーツ障害・外傷の治療技術が重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

3-①アスレティックトレーナーにとって協力・責任・公正などの社会的な態度や心構えが重要だと
思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

3-②アスレティックトレーナーにとって辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的な態度や心構えが重要だと思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

3-③アスレティックトレーナーにとって安全に対する配慮・準備に関する態度や心構えが重要だと思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

4-①アスレティックトレーナーにとって指導上の問題把握のし方が重要だと思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

4-②アスレティックトレーナーにとって指導上の活動の工夫のし方が重要だと思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

4-③アスレティックトレーナーにとって指導上の成果確認（評価）のし方が重要だと思いますか？

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

3. 回答と比較の方法

回答は「そう思う」、「どちらかと言うとそう思う」、「どちらかと言うとそう思わない」、「そう思わない」、「わからない」の5種類とした。各学年における「そう思う」と答えた者の割合を比較した。統計的処理にはExcel 2007 (Microsoft社製) を用い、3群間の比較、多重比較ともに χ^2 検定を用いた。有意水準は5%未満とした。

Ⅲ. 結果

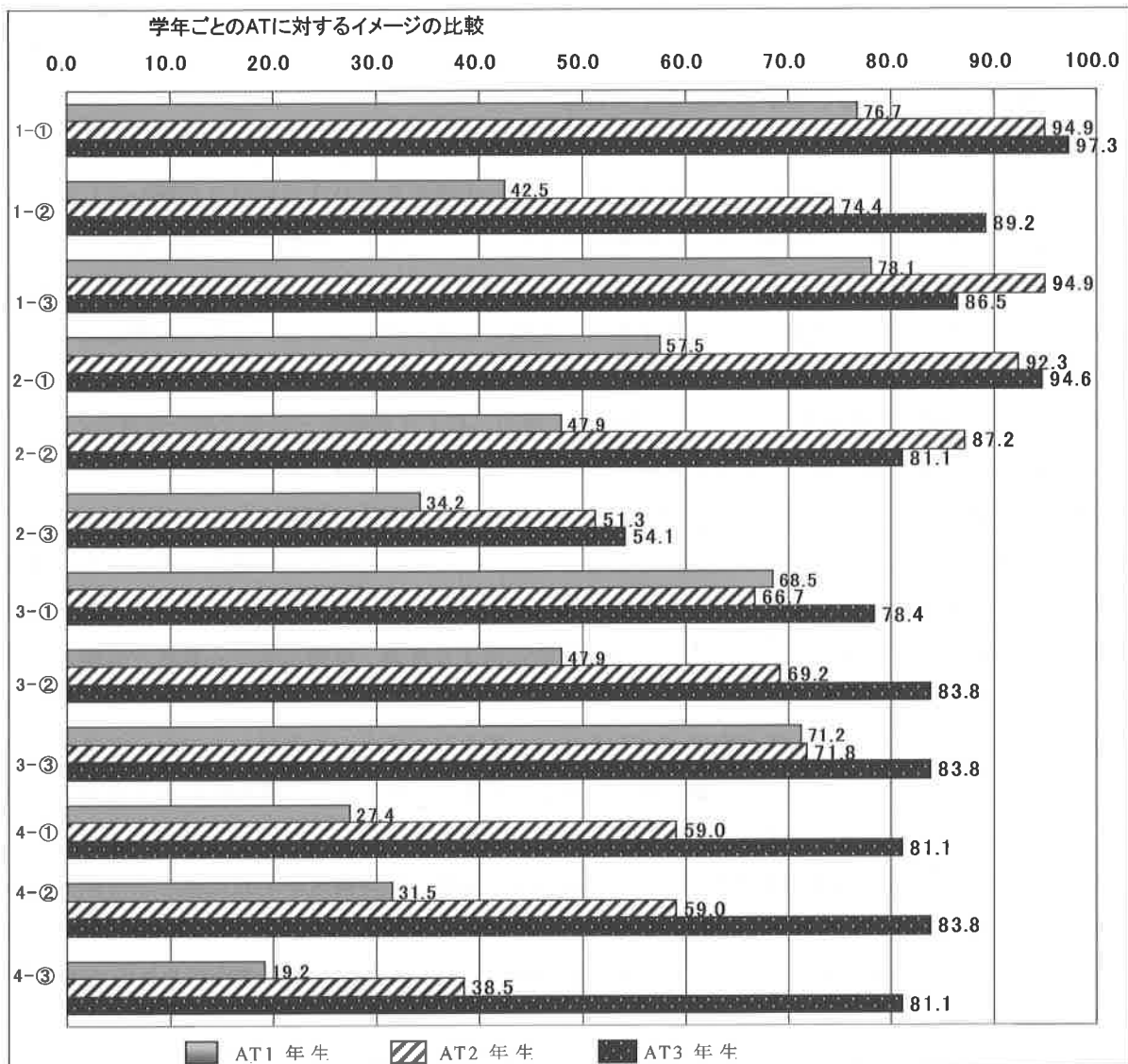
質問紙の回収率は100%であった。

1. 「知識」に関する小項目では、1-①において「そう思う」と回答した者の割合は、AT1年のみ他の学年と比較して有意に低かった (AT1年<AT2年, AT3年: $P<0.05$)。1-②においては学年が低いほど「そう思う」と回答した者の割合が有意に低かった (AT1年< AT2年<AT3年: $P<0.05$)。1-③では有意な差は確認されなかった。(図1)

2. 「技術」に関する小項目では、2-①において「そう思う」と回答した者の割合は、AT1年のみ他の学年と比較して有意に低かった (AT1年<AT2年, AT3年: $P<0.001$)。2-②において「そう思う」と回答した者の割合は、AT1年のみ他の学年と比較して有意に低かった (AT1年<AT2年, AT3年: $P<0.001$)。2-③では有意な差は確認されなかった。(図1)

3. 「態度」に関する小項目では、3-②において「そう思う」と回答した者の割合は、AT1年のみ他の学年と比較して有意に低かった (AT1年<AT2年, AT3年: $P<0.001$)。3-①, 3-③では有意な差は確認されなかった。(図1)

4. 「方法」に関する小項目の比較では、4-①, 4-②, 4-③の全てで学年が低いほど「そう思う」と回答した者の割合が有意に低かった (AT1年< AT2年<AT3年: $P<0.05$)。(図1)



【図1】 学年ごとのATに対するイメージの比較

「そう思う」と回答した者の割合を示す。

IV. 考察

本学科におけるAT養成課程は学生の選択制となっており、基本となる教育課程は柔道整復師養成を目的としたものである。AT養成課程においては、1年生ではアスレティックトレーナーの役割やトレーニング科学、運動器の解剖と機能などの基礎的科目と、スポーツ現場の見学実習を行っている。2年生では、コンディショニングの実技なども加わり、スポーツ現場実習においてはストレッチングやテーピング、アイシングなどを選手に施す機会も増える。3年生では、選手の全体像を把握する目的で行われる検査・測定と評価と、アスレティックリハビリテーションが中心となる。これは収集した情報を統合、解釈し、問題点を抽出してアスレティックリハビリテーションプログラムを作成し、指導する能力を養う講義、実習群である。同時にスポーツ現場においては、総合的なトレーナー業務を行える事を目的とした実習が行われている。以上の学習課程を考えた上で、得られた結果を考察する。

1. 「知識」に関する大項目の重要性の認識は、AT1年生はAT2, 3年生と比較して有意に低い小項目が多かった。これは、AT1年生はAT2, 3年生と比較すると学習の機会が少なく、またスポーツ現場における経験が不足していることが原因と考えられる。

2. 「技術」に関する大項目においても、1と同様の結果であった。「技術」も「知識」と同様に、学内の講義や実技授業で教授されたのちに現場実習で実際に応用するというプロセスを踏む。したがってAT1年生は学習とスポーツ現場における経験が不足していることがこの結果の原因になっていると考えられる。1. 「知識」、2. 「技術」の項目は教育の量も重要な要素であると考えられるため、早期に重要性の認識率を上げるのは難しく、学年が進んだ段階で認識率が上がっているよう段階的に発展する授業を組んでいく必要があるだろう。

3. 「態度」に関する大項目は、3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的な態度や心構え」の小項目のみ、AT1年生はAT2, 3年生と比較して有意に低いことが確認された。これはスポーツの現場実習で必ず経験する、選手やチームに尽くすという体験が、重要性の認識を高める要因として強く作用する可能性がある項目であることが原因と考えられる。それ以外の3-①「協力・責任・公正などの社会的な態度や心構えが重要」という小項目は、まだ学生という保護される立場ということから重要性の認識を高めにくい項目であり、また3-③「安全に対する配慮・準備に関する態度や心構えが重要」という小項目も、実習生という専門家として独立して働いているわけではない立場では、重要性の認識を高めるのは難しい項目があるため、上級生と下級生とで認識に差がないと考えられた。しかしこれらは将来専門家として働く際には非常に重要な項目であり、重要性に対する認識を深める新たな取り組みが必要であろう。

4. 「指導」に関する大項目の重要性は、学年が進むほど重要性の理解度が有意に高くなる傾向が確認された。これは段階的に重要性の認識が進んでいっていることを示していると考えるが、低学年においても重要性の認識を高めるために早期からの取り組みがなされれば、その後の行われるAT教育がより効果的なものになるだろう。

以上より、各大項目の重要性の認識を改善させるために必要な対応は異なることがわかった。AT教育の大家であるKnightは学生それぞれの目標に対して自己啓発をするための*critical thinking*の手法が必要と述べており⁹⁾、この点についても留意して対応する必要があるかもしれない。

今後この知見の信頼性を高めるために、1) 対象者の人数および抽出する養成校の数を増やし、2) AT4年生まで含めた認識の違いを継続的に調査する必要があると考える。

V. まとめ

将来ATを目指す学生が持つATのイメージについて調査し、次の様な結果が得られた。

1) ATの「知識」「技術」に関しては、AT1年生と比較してAT2, 3年生が有意に高い重要性の認識率を示した。1年間の基礎教育の効果によるものと考えられた。

2) ATの「態度」に関しては、「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的な態度や心構え」の小項目のみ「知識」「技術」と同様にAT1年生と比較してAT2, 3年生が有意に高い重要性の認識率を示した。しかしそれ以外の小項目では、学年間で有意な差は確認されなかった。これは専門家として独立してスポーツ現場活動に従事していないことが影響していると考えた。現状の教育方法では学年

が進むことで重要性の認識が高まるものではないため、教育方法の改善が必要であると思われた。

3) ATの「指導」に関しては、学年が進むにつれて重要性の認識が有意に高まっていることが明らかとなった。しかし低学年の認識も高めるよう教育内容を改変することで、より効果的な授業展開が可能となると思われた。

VI. 文献

- 1) 河野一郎：“アスレティックトレーナー制度の歴史” in公認アスレティックトレーナーテキスト
① アスレティックトレーナーの役割, 財団法人日本体育協会, 東京, 2-5, 2007
- 2) 山本利春：アスレティックトレーナーになる為には？そして就職する為には？ 体力科学、56：102, 2007
- 3) 浦辺幸夫：スポーツ分野の医療チームにおける理学療法士の役割と課題, 理学療法、22：1213-21, 2005
- 4) 『文部科学省高等学校生徒指導要録各教科の評価の観点及び趣旨』, 文部科学省. 2007
- 5) Knight KL, Editorial Hyposkillia & Critical Thinking: What's the Connection? Athl Train Educ J3: 79-81, 2008